

成城の雰囲気

朝 香 花

近年、成城学園の雰囲気が変わってきたと感じている人は私の周囲にも多く、悪くなった点を数え上げる意見があるのも事実であるが、私自身は決して悲観的ではなく、例えば後輩学生たちは我々が学生だった頃より得てしまじめで意欲がある子が多いように感じている。時代が変われば雰囲気も変わるのが自然なことで、特に長年教鞭をとられた先生の退職は学校の雰囲気を変える大きなきっかけの1つとなるように思う。ここ数年、成城大学の学部学科を問わず名物教師と呼ばれた先生方が多く退職され、若い先生方が次々と入って来られた。懐かしい空気は薄皮を剥ぐように去り、新たな風が吹き込んで来る——そうして気が付くと、新しい成城が生まれているのである。

この春、吉田正治先生と塩川千尋先生が退職される。このお2人の成城大学に対する多大な貢献と存在感を考えれば、英文学科の雰囲気にもおそらく変化があることであろう。私は残念ながら時間割の都合で塩川先生の授業を履修する機会には恵まれなかったが、吉田先生には大学1年生の時に履修した「英語学研究」から始まり、英語学のまさにイロハから教えて頂いた。

私が学生だった頃の英文学科の雰囲気から拙文を始めてみたい。

私が成城大学に入学したのはちょうど20年前のことである。新築と改修が続け様に行われている現在とはずいぶん違って、往時は古めかしい佇まいであった。正門を入れてすぐ右手のこんもりした木立の下、所狭しと自転車と並んでいる間のほっそりとした小道の奥の図書館。校歌に「ふりにし松」と歌われた、おそらくは創立当初からあるのではと思われる松の大木が隅隅に立つ中庭の向かって左手から、奥行き深い凝った設計で威容を誇った3号館、2号館、そして現在と（見掛けは）あまり変わらぬ様子の1号館、裏手にはコンクリート打ち放しのモダンな5号館。風向きによっては厩の匂いがキャンパスを漂い、初夏には栗の花、初秋には金木犀、文化祭の頃には銀杏の香りが季節を知らせてくれたものだった。

バブル期と学生生活が重なった私達は、大学で適当に勉強してとりあえず卒業さえすれば、それなりに名の通った大企業に就職できる当て（「思い込み」とも言う）があったせいも、今時の学生たちに比べれば随分と暢気だった。出席を取らない授業はテスト前に勤勉な友人からノートを借りる算段さえ付けば出ないで済ませる学生も少なくはなかった。

先生方にも、語弊があることを承知で書くのだが、暢気な方は多かった（「暢気」という言葉は正確ではないかもしれないが）。大抵の先生方は授業開始の鐘が鳴って10分は教室に現れない。20分近く遅れる場合も少なくない。そして講義を行って、そして5分か10分ほど早く授業は終わるのだ。

一般的に「近頃の学生は…」と教師は口癖のように言うものだが、実際は昔もそして今も、自分を高めてくれる出席しがいのある授業は学生の人気を集めるものだ。20年前の私たちも、例えば90分のはずの授業がたとえ60分しか行われなくても、その60分の内容が濃ければそれで納得し、満足した。実際のところそれ以上長く授業をされては身が持たないようなインテンシブな授業も存在していた。さらに「禁煙」の張り紙の前でタバ

コを吸って教室中煙臭くしながら、しかし知的好奇心をピリピリと刺激してくれる授業なら、全身タバコ臭くなって咳が止まらなくなっても我慢した。

ところがそういう先生方の個性をも楽しみ学生生活を充実させながらも、就職活動をする頃になって、残り少ないモラトリアムを惜しみつつこんなことを言った友がいた。

「先生達は天職を得ているって感じだよ。あれでは絶対社員はできないじゃない。」

なんと罰当たりな！ …がしかし一理あった。会社に入れば就業時間は守らなくてはならないし、禁煙の場所で喫煙しては絶対にならない。知的好奇心を満たしてくれる(教)師でありつつ、これから多くの学生が巣立って行く予定の社会の師(モデル)としては疑問符が付きかねない。批判というよりは暢気な学生ならではの笑い話、むしろ愛情表現と取ってもらってもいいのだが、教員志望の私としては、学究に没頭するならば社会生活において後回しにせざるを得ない側面があるのもまた事実なので、複雑な思いを抱いたからこそ覚えているやり取りである。

この話には続きがある。確かそれは吉田正治先生の授業の後だった。きっちり勉強したという充実した疲労感と高揚した気分の中で数人の学友たちとお茶をしていたのだが、上述の話を受けて誰ともなくこんな声が。

「吉田先生ならきっと会社員でも大丈夫よ。」

その場に居た全員が深く頷いた。

こんな内輪話をこのような場を書いてしまい、先生が一体どのように思

われるか想像しただけでまさに汗顔の至りであるが、おそらくこれが、私だけではなく多くの教え子達の共通した吉田先生に対する思いであった。

先生は授業に遅れていらっしゃることは一度もなかった。始業の鐘と共に研究室を出発するのだと仰っていた。授業の教材は私たちの実力相応より少し難しい、が単位を無事修得した際には確実に自分の知恵や能力が向上したと実感できる物を選んで下さった。一人一人の学生に対する対応も大変きめ細やかで、レポートや定期試験も丁寧に採点して返却して下さいました。現在のように成績問い合わせ制度などない時代に、自分の評価をフィードバックできる機会は貴重だった。

そもそも成城大学は教師と学生の距離が大変に近い。私達が学生の頃、英文科のゼミの定員は1学年あたり8人だった。教員1人当たりの学生数は6人という割合になる。一流の先生方を少人数の学生で独占できる幸福を有難く思っていた学生は少なくないはずで、英語で書かねばならなかった卒業論文もこの少人数制があってこそ可能であったのは言うまでもなく、先生方の大なる献身に感謝をしない卒業生はいまい。が、しかし、時に少人数ならではの馴れ合いや甘えも散見されたのは事実で、学生の側は言うに及ばず、教師側も、例えば前述の始業時間の遅れや教室内での喫煙などは一種の甘えであったと指摘することができよう。こうした甘えの構造は閉鎖されたモラトリアム社会の中でのみ可能なものであり、多くの卒業生が進む社会において、いざ社会人としての一步を踏み出した暁には一切の甘えを捨て社会の規範を遵守して生きなくてはならない。吉田先生の姿はそうした社会人の大学における手本であり、就職活動を通してほんの少し社会を垣間見てはじめて私たちは、それまで薄々気付いていながら言葉にはしていなかった事実を改めて実感したのであった。

研究と教育の異なる2つの分野の専門家であらねばならないという点で大学の教師はバランスの取りにくい危ない橋を渡っているような物だが、

吉田先生は常に絶妙なバランスを保ち、多くの学生たちがこれから進むであろう社会人生活のある種のモデルを提供して下さったように思う——つまり規範を守り、誠実に生きるということである。

多くの学友が就職し、そのまま仕事を続けている者もあれば、結婚などで職を辞した者もいる。どのような形にせよ、誰もが成人として社会に何らかの貢献を求められ、それをできるだけ果たそうと努める中で折々に、かつて学生として学ぶことが勤めだった幸福な時代を思い返すことがあるだろう。そんな時、時に破天荒とも言える味のある授業で自分達を豊かにして下さった先生方の記憶とはまた違った引き出しから吉田先生の静謐な授業の思い出を手繰りだし、誠実に生きることがますます難しくなっている社会において疲れや焦燥を感じる自分を励ます糧としているのは私だけではあるまい。

最近ある先生が「成城の学生は学生の方から教師に挨拶をしてくれる」と驚いていらした（そしてそれが驚きに値することが、私には新鮮な驚きであったのだが）。もちろん成城大学に馴染の良い学生が特に多く集っているからというよりは、先生が常に自分が誰であるか認識しているという意識を学生が持っているからであろう。この学生と教師の間の暖かい近しさは、教師による学生の人格の尊重が前提となって成城学園が創立以来育んで来た大切な雰囲気である。恩師が成城を去って行かれるのは只只寂しい一言に尽きるが、残された者、幸いにも成城に残ることができた者の一人として、いつまでも変わらずに受け継いで行くべき雰囲気は大切に守っていきたいと思うのだ。